

「何があっても変わらずに私を待っていてくれる」

創世記 第1章1～3節

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

日本文化学科教授 清水 均

最近、「希望」という言葉を目や耳にすることが多くなったような気がします。テレビドラマでは『日本沈没—希望のひと—』というタイトルが付けられ、NHKの「朝ドラ」の脚本家は『おかえりモネ』について「誰もが以前よりも苦しい日々を過ごされている中で、最後は希望を感じていただけるように書いたつもりです」と述べ、また『鬼滅の刃』が流行っていた頃にはTwitterで「自分の大事なものを守るためだけに苦しみながら戦う物語が流行っているのは、日本全体に希望がないからではないか」と呟かれていました。恐らくは「希望がない」という背景があって、だから「希望を語る(欲する)」という状況が今の世の中にあるのだらうと思います。では、そもそも私たちのどのような状態が「希望がある」と言えるのでしょうか？あるいは逆に、今多くの人が「希望が感じられない」としたら、私たちはどのような状態に陥っているのでしょうか？

随分前のことになりますが、かつてこの大学におられた牧師先生から「聖学院大学という名称が決まる前は「希望学園」というのが有力な候補だったんですよ」ということを伺ったことがあります。そういえば聖学院大学の校章は新約聖書「コリントの信徒への手紙一」の13章13節に掲げられている有名な聖句「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大なるものは、愛である。」に由来していますが、「希望学園」という名称も、恐らくこの聖句に結び付くものとして考えられていたのではないのでしょうか。いずれにせよ、聖書の中で「希望」の意味を最も端的に表現しているのはこの聖句だと私には思えます。「神の愛を希望すること」、これが「希望」の核心だと言うことです。では、「希望がない」状態というのはどのような状態なのか。勿論聖書的に言えば「神の愛」を求めない状態ということになりますが、ここでは一旦聖句から離れてみましょう。

太宰治という作家の小説『人間失格』では、主人公が「罪」の対義語を考える場面が出てきますが、太宰にならって「希望」の対義語を考えてみることにします。私はこれを「無気力・無関心・無責任」というかつて「シラケ世代」といわれた若者、つまりは私の世代の「三無主義」に向けられた言葉で表してみたいと思います。あるいはこれに「無感動」を加えた「四無主義」でも良いでしょう。要するに「何もしないこと、何も出来ないこと」という意味での「無為」という語がこれにあたるのではないかと思うのです。私の定義はともかく、みなさんも、そのような意味での「無為」の状態に陥ったことはあるかもしれませんね。そして、その時「希望」を持つことが出来なかったのではないのでしょうか。では、そのような状態にある時、私たちはどのようにすれば良いのでしょうか？私は今日、そのための一つのヒントをみなさんと共有したいと思います。

原田マハさんという作家のエッセイに『モネのあしあと』というのがあります。原田さんはフランスのパリ在住ですが、2020年にコロナ禍におけるロックダウンによって家から一歩も出ることが出来ない状況になります。その時の経験をこのエッセイの「あとがき」の中に次のように記しています。

“生きているあいだに、まさかこんなことが起こるなんて。…そんなとき、私のパソコンにオランジェリー美術館からメールが届いた。…「あなたの再訪を待って、展示会で睡蓮は咲いています。」…そのメッセージと動画は私の胸の奥深いところにそっと触れてきた。ふいに熱いものが込み上げて、気がついたら私は泣いていた。なんの涙だろう。絶望、不安、寂しさ……いや違う。これは希望の涙だ。そんな気がした。世界が完全に閉じてしまったいま、この瞬間、それでもモネの睡蓮は花を咲かせている。そして、決して閉じることはない。その事実には胸打たれた。どうしたって起きてしまう人生の不幸、避けられない災厄、世界を覆い尽くす不穏。それらに抗って睡蓮は花開いている。クロード・モネは、自然の摂理にままならぬ人の営みを重ね合わせて、大丈夫、いずれ花は開くのだから——と諭してくれているのではないか。そう気がついて、私の心に希望の灯火がともったのだ。”（注：文章中の「…」の箇所は中略を意味しています）

世界がどんな状態にあっても今、モネの描いた睡蓮の花が変わらずにそこにあって、私を待っていてくれる。「大丈夫」だと。そして、そのことが原田さんにとっては「希望の灯火」だと感じられたということです。「何があっても変わらずに私を待っていてくれる存在」、私もこれこそが「希望」をもたらしてくれるのだと思います。そして、その「希望」は「希望の灯火」と書かれているように「光」のようなものではないでしょうか？

“神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。”聖書冒頭に記されたこの聖句を改めて味わい、「大丈夫だ」という「希望」への確信をみなさんと共有したいと思います。

○祈り

ご在天の父なる神様。コロナ禍にあって変則的な形ではありますが、こうしてあなたが「待っていて」下り、全学礼拝が変わらずに行われていることに感謝申し上げます。

主よ、本日のこの奨励では「希望」ということについて考えてみました。現在、「希望」は「希望が持てない」状況にあるからこそ、逆に「希望を持ちたい」という願いにおいて私たちにとってかけがえのない言葉になっています。そのように今、「希望」は困難な状況にあり、ここから新たなる「希望」を見いだすことは難しいと感じることも多くあります。けれども、あなたは『旧約聖書』冒頭の言葉から既にして「光」という「希望」を示して下さい。どうか私たち一人ひとりが、これからの人生の中で、「何があっても変わらずに待っている」というあなたの「愛」に包まれて、「希望」を抱いて生きていくことが出来ますよう、お導き下さい。

この小さき祈りを主イエスキリストの御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン